

善無畏三蔵は月氏烏菟奈国の仏種王の太子なり。七歳にして位に即き、十三にして国を兄に譲り出家遁世し、五天竺を修行して五乗の道を極め三学を兼ね給ひき。達磨掬多と申す聖人に値ひ奉りて真言の諸印契一時に頓受し、即日御灌頂なし入天の師と定まり給ひき。雞足山に入りては迦葉尊者の髪をそり王城に於て雨を祈り給ひしかば、観音日輪の中より出でて水瓶を以て水を灌ぎ、北天竺の金粟王の塔の下にして仏法を祈請せしかば、文殊師利菩薩、大日經の胎蔵の曼荼羅をを現はして授け給ふ。其の後開元四年丙辰に漢土に渡る。玄宗皇帝之を尊むこと日月の如し。又大早魃あり。皇帝勅宣を下す。三蔵、一鉢に水を入れ暫く加持し給ひしに、水の中に指許りの物有り變じて竜と成る。其の色赤色なり。白氣立ち昇り、鉢より竜出でて虚空に昇り忽ちに雨を降らす。此くの如くいみじき人なれども、一時に頓死して有りき。蘇生りて語りて云はく、我死につる時獄卒来たりて鉄の縄七筋付け、鉄杖を以て散々にさいなみ、閻魔宮に到りにき。八万聖教一字一句も覚えず、唯法華經の題名許り忘れず。題名を思ひしに鉄の縄少しき許りぬ。息続いで高声に唱へて云はく「今此三界皆是我有、其中衆生悉是吾子、而今此处多諸患難、唯我一人能為救護」等云云。七つの鉄の縄切れ砕け十方に散ず。閻魔冠を傾けて南庭に下り向かひ給ひき。今度は命尽きずとて歸されたるなりと語り給ひき。

今日蓮不審して云はく、善無畏三蔵は先生に十善の戒力あり。五百の仏陀に仕へたり。今生には捨てがたき王位をつばきをすつるがごとくこれをすて、幼少十三にして御出家ならせ給ひて、月支国をめぐりて諸宗を習ひ極め、天の感を蒙り、化導の心深くして震旦国に渡りて真言の大法を弘めたり。一印一真言を結び誦すれば、過去現在の無量の罪滅しぬらん。何の科に依りて閻魔の責をば蒙り給ひけるやらん、不審極まり無し。善無畏三蔵真言の力を以て閻魔の責を脱れずば天竺・震旦・日本等の諸国の真言師、地獄の苦を脱るべきや。委細に此の事を勸へたるに、此の三蔵は世間の輕罪は身に御せず、諸宗並びに真言の力にて滅しぬらん。此の責は別の故無し、法華經誹謗の罪なり。大日經の義釈を見るに「此の經は是法王の秘宝、妄りに卑賤の人に示さず、釈迦出世の四十余年に舍利弗慇懃の三請に因つて方に為に略して妙法蓮華の義を説くが如し。今此の本地の身は又是妙法蓮華最深秘処なり。故に寿量品に云はく、常に靈鷲山及び余の諸の住处に在り。乃至我が浄土は毀れざるに而も衆は焼き尽くと見ると、即ち此の宗瑜伽の意なるのみ。又補処の菩薩の慇懃の三請に因つて方に為に之を説く」等云云。此の釈の心は大日經に本迹二門、開三顯一・開近顯遠の法門有り。法華經の本迹二門の如し。此の法門は法華經に同じけれども、此の大日經に印と真言と相加はりて三密相應せり。法華經は但意密許りにて身口の二密欠けたれば、法華經をば略説と云ひ、大日經をば広説

と申すべきなりと書かれたり。此の法門第一の誤り、謗法の根本なり。此の文に二つの誤り有り。又義釈に云はく「此の經横に一切の仏教を統<sup>す</sup>ぶ」等云云。大日經は当分<sup>ずいたい</sup>隨他意の經なるを誤りて隨自意跨節の經と思えり。かたがた誤りたるを實義<sup>おぼ</sup>と思し食<sup>め</sup>せし故に、閻魔<sup>えんま</sup>の責めをば蒙<sup>あ</sup>りたりしか。智者にて御坐せし故に、此の謗法を悔<sup>お</sup>ひ還<sup>わ</sup>して法華經に翻<sup>ひるがえ</sup>りし故に、此の責めを免<sup>まぬか</sup>るゝか。天台大師釈して云はく「法華は衆經を總括す。乃至輕慢止まざれば舌、口中に爛<sup>ただ</sup>る」等云云。妙樂大師云はく「已<sup>い</sup>今<sup>こん</sup>当<sup>とう</sup>の妙此に於て固く迷へり。舌爛れて止まざるは猶華報と為す。謗法の罪苦長劫に流る」等云云。天台妙樂の心は、法華經に勝れたる經有りと云はむ人は無間地獄に墮つべしと書かれたり。善無畏三蔵は、法華經と大日經とは理は同じけれども事の印真言は勝れたりと書かれたり。然るに二人の中に一人は必ず惡道に墮つべしとをばふる処に、天台の釈は經文に分明なり、善無畏の釈は經文に其の証拠見へず。其の上閻魔王の責めの時我が内証の肝心とをば<sup>思</sup>しめす大日經等の三部經の内の文を誦せず。法華經の文を誦して此の責めをまぬかれぬ。疑ひなく法華經に真言まさりとをもう誤りをひるがへしたるなり。其の上善無畏三蔵の御弟子不空三蔵の法華經の儀軌には、大日經・金剛頂經の兩部の大日をば左右に立て、法華經多宝仏をば不二の大日と定めて、兩部の大日をば左右の臣下のごとくせり。

伝教大師は延暦二十三年の御入唐、靈感寺の順<sup>じゆんぎやう</sup> 暁和尚に真言三部の秘法を伝はり、<sup>ぶつろう</sup> 仏瀧寺の行<sup>ぎやうまんざす</sup> 満座主に天台の宝珠をうけとり、顯密二道の奥旨を極め給ひたる人。華嚴・三論・法相・律宗の人々の自宗我慢の辺<sup>へんしゆう</sup> 執を倒して、天台大師に歸入せる由をかゝせ給ひて候。依<sup>え</sup> 憑<sup>ひようしゆう</sup> 集・守護章・秀句なむど申す書の中に、善無畏・金剛智・不空等は天台宗に歸入して智者大師を本師と仰ぐ由のせられたり。各々思えらく、宗を立つる法は自宗をほめて他宗を嫌ふは常の習ひなりと思えり。法然なむどは又此の例を引きて、曇鸞<sup>どんらん</sup>の難易・道綽<sup>どうしゃく</sup>の聖道淨土・善導<sup>しやうぞう</sup>が正雜二行の名目を引きて天台・真言等の大法を念仏の方便と成せり。此等は牛跡に大海を入れ、梟<sup>ごしゃく</sup>の額を州<sup>けん</sup>に打つ者なり。世間の法には下剋上<sup>げこくじやう</sup>・背上向下は国土亡乱の因縁なり。仏法には権小の經々を本として実經をあなづる、大謗法の因縁なり。恐るべし恐るべし。

嘉祥寺の吉蔵大師は三論宗の元祖、或時は一代聖教を五時に分け、或時は二蔵と判ぜり。然りと雖も竜樹菩薩造の百論・中論・十二門論・大論を尊みて般若經を依憑<sup>えひよう</sup>と定め給ひ、天台大師を<sup>へんしゆう</sup> 辺執して過ぎ給ひし程に、智者大師の梵網の疏を見て少し心と<sup>解</sup>け、やうやう近づきて法門を<sup>ちやうもん</sup> 聽聞せし程に、結句は一百余人の弟子を捨て、般若經並びに法華經をも講ぜず、七年に至って天台大師に仕えさせ給ひき。高僧伝には「衆を散じ身を肉橋と成す」と書かれたり。天台大師高座に登り給えば寄りて肩を足に備え、路を行き給えば負<sup>お</sup>ひ奉り給ふて堀を越え給ひき。吉蔵大師程の人だにも謗法ををそれてかくこそつかえ給ひしか。然るを真言・三論・法相等の宗々の人々、今<sup>未</sup>す<sup>未</sup>へずへに成りて<sup>未</sup> 辺執せさせ給ふは自業自得果なるべし。

今の世に淨土宗・禪宗など申す宗々は、天台宗にをとされし真言・華嚴等に及ぶべ

からず。依經既に楞伽經・觀經等なり。此等の經々は仏の出世の本意にも非ず、一時一会の小經なり。一代聖教を判ずるに及ばず。而も彼の經々を依經として一代の聖教を聖道淨土・難行易行・雜行正行に分かちて、教外別伝なむどのゝする。譬へば民が王をしえたげ、小河の大海を納むるが如し。かゝる謗法の人師共を信じて後生を願ふ人々は無間地獄脱るべきや。然れば当世の愚者は仏には釈迦牟尼仏を本尊と定めぬれば自然に不孝の罪脱れ、法華經を信じぬれば不慮に謗法の科を脱れたり。

其の上女人は五障三従と申して、世間出世に嫌はれ一代の聖教に捨てられ畢んぬ。唯法華經計りにこそ竜女が仏に成り、諸の尼の記莂はさづけられて候ひぬれば、一切の女人は此の經を捨てさせ給ひては何の經をか持たせ給ふべき。天台大師は震旦国の人、仏滅後一千五百余年に仏の御使ひとして世に出でさせ給ひき。法華經に三十卷の文を注し給ひ、文句と申す文の第七卷には「他經には但男に記して女に記せず」等云云。男子も余經にては仏に成らざれども且く与へて其れをば許してむ。女人に於ては一向諸經に於ては叶ふべからずと書かれて候。縦令千万の經々に女人仏に成るべしと許されたりと雖も法華經に嫌はれなば何の憑みか有るべきや。

教主釈尊、我が諸經四十余年の經々を未顕眞実と悔い返し、涅槃經等をば当説と嫌ひ給ひ、無量義經をば今説と定めをき、三説にひでたる法華經に「正直に方便を捨て、但無上道を説く、世尊の法は久しくして後要らず当に眞実を説くべし」と釈尊宣べ給ひしかば、宝上世界の多宝仏は大地より出でさせ給ひて眞実なる由の証明を加へ、十方分身の諸仏は広長舌を梵天に付け給ふ。十方世界微塵数の諸仏の御舌は不妄語戒の力に酬いて八葉の赤蓮華にをいでさせ給ひき。一仏二仏三仏乃至十仏百仏千万億仏、四百万億那由他の世界に充滿せりし仏の御舌をもつて定めをき給える女人成仏の義なり。謗法無くして此の經を持つ女人は十方虚空に充滿せる慳貪・嫉妬・瞋恚・十惡・五逆なりとも、草木の露の大風にあえるなるべし。三冬の氷の夏の日に滅するが如し。但滅し難き者は法華經謗法の罪なり。譬へば三千大千世界の草木を薪と為すとも、須弥山は一分も損じ難し。縦令七つの日出でて百千日照らすとも、大海の中をばかわかしがたし。設ひ八万聖教を読み大地微塵の塔婆を立て、大小乗の戒行を尽くし、十方世界の衆生を一字の如くに為すとも、法華經謗法の罪はきゆべからず。我等過去現在未来の三世の間に仏に成らずして六道の苦を受くるは偏に法華經誹謗の罪なるべし。女人と生まれて百惡身に備ふるも、根本此の經誹謗の罪より起これり。

然者此の經に値ひ奉らむ女人は皮をはいで紙と為し、血を切りてすみとし、骨を折りて筆とし、血のなんだを硯の水としてかきたてまつるともあくごあるべからず。何に況んや衣服・金銀・牛馬・田畠等の布施を以て供養せむはもののかずにてかずならず。